

【 JASPM37 シンポジウム 】

ライブミュージックと地域社会

司会・コーディネーター：吉光 正絵（長崎県立大学）

基調講演：村川和彦

（エフエム長崎代表取締役社長／スカイジャンボリー統括プロデューサー）

パネリスト

永富真梨（関西大学）

永井純一（関西国際大学）

南田勝也（武蔵大学）

本シンポジウムでは、地域に根ざしたライブミュージックの具体的な事例を通して、社会貢献を含む、地域社会との関わりを多角的に検討する。ライブミュージックに関する研究は、従来から、個人の趣味や消費、それによる楽しみや癒しの経験、アイデンティティの確認、非日常的な連帯や日常的な繋がり育成といった、人間にとって極めて重要な効果について分析してきた。

特に、コロナ禍による大規模な中止や延期期間の経験は、ライブミュージックが持つ価値を経済の側面だけでなく、社会、文化やアイデンティティ、空間や場所性の側面から多角的に捉え直す決定的な契機となった。これにより、ライブミュージックを「社会関係資本（Social Capital）」の源泉として位置づけ、その社会貢献価値を見直すための議論が活発化している。経済効果という指標だけでは可視化されない、これらの文化的・社会的な見えざる価値を分析することが、ポピュラー音楽研究の重要な役割の一つと言える。

まずは、基調講演として、村川和彦氏（エフエム長崎代表取締役社長／スカイジャンボリー統括プロデューサー）からローカル FM 局であるエフエム長崎の取り組みについてご講演いただく。

エフエム長崎は、SUMMER SONIC や ROCK IN JAPAN FESTIVAL に先駆けて 1999 年から現在まで 25 年以上にわたり野外ロックフェスティバル「Sky Jamboree」（通称：スカジャン）を運営し、地域社会に大きく貢献してきた。次の 4 つのテーマからお話しいただく。

（1）「場所性」に根差す理念の構築

被爆地・長崎の象徴である「稲佐山」を舞台とし、「one pray in nagasaki」というメッセージを掲げてきたことの効果。メジャー／インディーズの垣根を越えた独自のブックイングとアイデンティティの維持、被爆 80 年（2025 年）に合わせた「ONE PRAY プロジェクト」（《核兵器より楽器を、争いより音楽を。》）の始動など、音楽を通じた平和発信という社会的役割がどのようにして実践可能となったのか。

（2）地域社会との協働

行政（市役所、警察消防）、交通機関、地元企業、学生アルバイトといった多様な

【 JASPM37 シンポジウム 】

ステークホルダーとの連携・協働体制をいかに構築し、持続可能な運営基盤を確立したのか。

(3) 地域活性化への具体的影響

全国から 1 万人の集客（うち県外客 5 割）の実現。宿泊や飲食といった地域経済への直接的な貢献。音楽を通じたシビックプライド（市民の誇り）の醸成にどう寄与しているか。

(4) 「ラジオマン」による社会的実践

主催者が「ラジオマン」であることの意義。ラジオが本質的に持つ「1 対 1」のコミュニケーション哲学をフェス運営に導入し、いかに「血が通った」関係性を構築しているか。

以上から、グローバル化するフェスティバル市場とは異なる、ローカル・メディア主導による地域密着型フェスティバルの運営モデルと、その社会的価値を提示する。

続いて、ポピュラー音楽学会の会員から先進的な取り組みに関する事例報告を行う。

永富真梨氏は、京都で開催されてきたカントリー・ミュージック・フェスティバルの運営経験を手がかりに、音楽イベント運営において女性たちが果たしてきた役割と、その体験の意味を、オート・エスノグラフィーの視点から考察する。フェスティバルやライブイベントにおいて、女性たちは演者・ファン・運営側の支援的な役割を担ってきた。彼女たちの活動や、それを通して見出す意義や意味は、ライブイベントや音楽フェスティバルに関する研究では十分に注目されてこなかった。本発表では、こうした実践を「ケア」と呼びうる関係性のあり方として捉え、日本のポピュラー音楽研究においてこれまで十分に論じられてこなかった視点として提示することを試みる。

永井純一氏は、地方のフェスティバルとライブ会場を対象とするフィールドワークおよび文献調査の成果から、日本のライブ文化の社会的意義を検討する。近年、海外のライブ産業はライブネーションなど大手プロモーターによる寡占化が進み、中央集権的に統合されつつあるのに対し、日本のライブシーンは分散的で各地に自立した音楽コミュニティが息づいている。その背景には、労音に始まる市民的音楽運動からコンサートプロモーターズ協会に至るまで、「自分たちで場をつくる」という実践が継承されてきたことがあげられる。その上で、今日のローカルフェスや地域密着型ライブハウスは、経済的効果のみならず、地域の社会関係資本や文化的自律性を再構築し、維持させる役割を担っている。こうしたライブ文化を、「イベントとベニュー」「アマチュアとプロ」のあいだで生成される実践として捉え、その相互関係を描く見取り図を提示する。

最後に、日本ポピュラー音楽学会会長の南田勝也氏が、ライブミュージックと社会のつながりを支える根源的連関について検討する。ライブが興行として成立するのは演者・聴衆・運営・地域社会の共働によることはいうまでもないが、聴衆が集わなければその相互作用は生じない。そこで、ライブゴアー定量調査のデータを用いて、「人はなぜライブに

行くのか」という動機にまつわる問いについての研究結果を報告する。音楽ライブの偶発的な時間の中で、言語化されないミメシスの象徴——視覚や聴覚を刺激する感覚的記号——への反応として生じる「美的再帰性」（S・ラッシュ）が発動することこそが、ライブ参加の動機ではないかと仮定し、調査データから析出した「アーティスト起因」「オーディエンス起因」「セルフ起因」の三因子が導くライブゴアーの心理的機制を明らかにする。

以上の報告の後に、登壇者によるクロストークで議論を深め、その後、フロア参加者からの質問に応答する時間を設ける。フェスやライブ文化を媒介とした学際的・比較文化的アプローチを共有し、ポピュラー音楽研究の持続的な発展に向けた新たな可能性を提示する場としたい。